

日達上人迄は正しく血脈は流 れていたが、日顕上人（本名 阿部信雄）で血脈は断絶した。

廣田 頼道

誰が言い出したのか、右の題名のような発言をし、日達上人迄の御本尊は拝んで良いが、日顕上人の御本尊は拝んではいけないという理由付けになった。

日達上人が阿部信雄師に相承を与える事が出来ず、阿部信雄師は受けたと主張し、「私が受けていないというなら、受けたという者、出て見ろ。日達上人が相承をしないで亡くなったら日蓮大聖人の仏法が断絶したということになってしまう。そういうことを言う者は、日達上人を貶める者である。」

という趣旨の、まるで小泉純一郎の屁理屈、国会答弁の様な事を言つて、阿部師自身は今日迄の25年間、堂々とやって来たつもりでいるのだが、胡散臭いものは、何年たつても風格も実績もつかず、胡散臭いだけなのであります。

日達上人迄は正しく血脈が流れていたのだろうか？

○法門に關係なく、第六十三世日満上人は山内の杉を伐採し、売却した事により退座を余儀無くされる。

○第六十世日開上人は、法門に關係なく文部省の指導のもと、派閥鬭争、中傷合戦の挙句に行なわれた管長選挙によつて選ばれし管長である。

○法門に關係なく、第五十八世日柱上人は宗門改革を打ち出しても、改革反対の人間が多く退座を余儀無くされ、相承を渡すこと迄拒むも、最終的には無派閥、学匠の日享上人に相承する。

○当山念珠の御相伝三通之レ有り、目師御筆、道師御目錄之レ有り、然る処に十八代日精上人御代之レを失ふと見へたり日舜（十九世）上人精師在府の砌、仰^セ越され候へば長持の中に之^レ有るべき由仰^セ候へども之^レ無しと見へたり、たとえ之^レ有るも日典（二十世）上人御代三太坊焼失（富士年表未記入）の砌、焼け失せたる者か、故に今御目錄十七条のみ之^レ有り御相伝悉皆失ふ故、日忍（二十一世）上人日俊（二十二世）上人已来数珠相伝に当山の相伝之^レを失ふ故に要法寺日大（要法寺六世）上人叡山相伝之^レ有り、喜^{ハシ}い哉、悲^シい哉、大衆方正法を守ると云へ

ども近代上人方は皆正法を失ひ天台真言の邪義に附する故に今日因（三十一世）之を改め近代上人方の附邪の法を疑ふのみ、

「袈裟数珠の事」日因上人（宗学要宗一卷37P）

近代上人方とは、十五世日昌上人、十六世日就上人、十七世日精上人、十八世日盈上人、十九世日舜上人、二十世日典上人、二十一世日忍上人、二十二世日俊上人、二十三世日啓上人の九代に及ぶ要法寺からの貫主を指す。袈裟数珠に關わる相伝だけが焼失したのではない事は、説明せずとも御理解頂けると思う。

○第十七世日精上人は「造仏誦誦」（宗学要宗九卷69P）の貫主。

○日目上人よりの相承判然とせず、第四世日道上人と日郷が長く論争となる。

この他にも幼少貫主（十才、十二才）相承や、相承を他人に預つてもらつて後で受けるといふような曲芸の様な歴史も、大石寺の資料に裏付けされて明らかであります。

こうして考えてみると、何を根拠にして第六十六世日達上人迄は血脈は正常に流れて来ていたと言え

るのでしょうか。私は言えません。

昭和五十二年の頃、大石寺は創価学会と、どの様にやつて行くのかということが教区でも議論されていました。まだ、正信会など出来ていない、「活動家僧侶」と創価学会に対して強硬派と言われている人達が称せられていた時代であります。

「大石寺の一の器の水を一器に、金口嫡々、無謬の相伝にも歴史上色んな問題があるんじゃないんですか。自分達だけ絶対正しくて、創価学会だけ間違つてると言うことは通らないと思いますよ。」と、私が発言した所、支院長が

「歴史の中でそつと蓋をして、墓場へ持つていかなくちゃあいけないんだ。問題にした所で、どういふ解決の方法があるというんだ。」

と言われた。私は、もう駄目だと思った。

無いのに有ると信じる。有ると思う。有ると人に伝える。有ると思わなければ謗法。有ると信じなければ成仏出来ず。有ると考える人々が世界中に拡大して広宣流布。

これが現代の日蓮正宗だということを、支院長の自嘲を帯びた力無い言葉に、衝撃を覚えた。現在の

大石寺が陥っている血脈観からすれば、日達上人にも血脈は流れていない。そして日達上人書写の本尊も拝むに値しない事は、日顕上人と大差ないという事になつてしまふのであります。

顕正会の血脈観

顕正会も、国立戒壇を日蓮大聖人の法門の全てと偏執している為、妙信講設立認可当時の貫主、日淳上人迄は正しい血脈が流れていたと主張し、過去の宗門史には眼を向けず、ひたすら頑迷に信じ、触れようともしない。しかし近年の日達上人、日顕上人は国立戒壇否定の主謀者である為に、日達は日顕に相承する事も出来ず、無残な最後だったと断定している。しかしここで不思議に思えるのは、相承が公式にあれば、それは認めるといふ姿勢が垣間見られることである。つまり顕正会も金口嫡々、一の器の水を一器に、無謬の相伝を大石寺の相伝と主張しているということになる。ならば日達上人が日顕上人に相承出来なかつたその相承は、今現在どうなつていると説明するのだろうか。「顕正新聞」には掲載されていらない。

創価学会の血脈観

創価学会は、広宣流布に邁進する自分達の所に血脈が流れていると主張する。自分達の所と言うわりには、池田先生の所から会員へ、師弟の契りに叶えばという条件付きで、裏切るなよ、裏切るなよ、裏切ったら地獄へ堕ちて幾度生れ変わつても塗炭の苦しみから逃れられないぞ、法華經の行者を裏切る罪は重いと脅迫と怨念の金縛にかけている血脈観で、法門的には一考の余地も無い。

日興跡条々の事の分半座を主張する人々の血脈観はどうだろう。日目上人の所へ貯っているのだろうか、どうしたら流れ、どうしたら止るのだろうか、日目上人の所に心を浮べて信心をするというが、日目上人のどういう所なのだろうか。

正信会の血脈観

私も含めて正信会の大半を占める僧俗は、正信会を形成する以前に、大石寺の貫主本仏、血脈絶対無謬、戒壇本尊絶対の思想を徹底して教育され育つて来た者達であります。しかし、創価学会の池田本仏

化、御本尊模刻問題に直面して、これは日蓮大聖人の法門から外れるものであると判断し、それを容認する貫主も、法門から外れる貫主も現実にいると日蓮上人の地位不存を裁判に訴え、小僧の時から教えられて来た血脈観を否定し捨てたかに見えました。加えて、この原稿の冒頭に列挙した歴史上の事実を

「継命新聞」において示し、日蓮上人の主張する、大石寺の血脈観がいかに幼稚なものかを検証したのであります。しかし、不思議な事に正信会の中には、

A. 日蓮上人が反省するか、違う英邁な人格を持った貫主が現われれば、元の様に大石寺へ帰つて、元の様に金口嫡々でやっていけると考える人達。

B. 日蓮上人を批判する為に過去の歴史的事実を暴き過ぎると、坊主の権威が損なわれるので、ほとんどにしなければいけない。正信会の道を選んだ人間は以前から正しかった。選ばなかった人間は謗法という事でやっていきたいという人達。

C. 今迄の大石寺の血脈観を否定したのだから、新しく日蓮正宗本来の血脈とは何なのかを研鑽し示さなければいけない。

大雑把に、この三種類の考え方に分裂してしまつ

ているのであります。

Aは、正信覚醒運動の目的は本山へ帰る事である。本来自分達は大石寺から仏法を救ったことで、感謝されて然るべきであり、批難される筋合いのものではない。能化にしてみらうか、二階級特進で優遇される立場である。教義解釈、法門はそのままに、古い時代の事や小僧の時に聞いた事がない様なことは議論をしないで、いつでも戻る事が出来るように、宗教法人を取得するなどんでもない事だ。

Bは、情況の流れ次第で有利だったらどっちでも良いですよ。でも団体交渉権だけは強く有利に持っていないければいけないので、規律正しく皆んな全体主義でいきましょう。

Cは、今迄自分達が教えてこられた本尊観、血脈観、広宣流布観、折伏観等々は全て問題があるので、全部洗い出して、正信覚醒運動が起った時の、本当の日蓮大聖人の法門を見出そうという考えを堅持しなければいけない。

このABCが信心、修行、研鑽によつて流動化し、将来融合して行くのかどうかは分かりませんが、今現在、こういう状態になっているのは事実なのであり

ます。

二十五年余り、正信覚醒運動に関わつて来て、日達上人から日顕上人への相承の有無を、

「御相承箱を見せてくれたら、もしかして、御相承があつたかも知れないぐらいに思うかも知れません。」という箱に入る血脈観を持つているようでは、もうこのA、B、Cは固定化し、融合の余地のない硬直した状態に達してしまつていのかという悲観的な見方も出来ます。

私自身は、正信会は、大石寺が抱き締めて来た血脈観を歴史資料を基に木端微塵に否定して来たのだから、本当の血脈とは、末法萬年、尽未来際は一切衆生の成仏に達する血脈とは何なのか、日蓮大聖人のいわんとしていた血脈とはなんなのか。それを研鑽し議論し会通出来る、一切衆生が納得せざるを得ない様な法門を何故示そうとしないのか。ボロ切れの様になっていることが分つていゝ代々の貫主の系譜を、昔と同じ様に黙つて信者さんに信じさせ、御供養で生活し、自分の短い人生の間だけ波風が立たず、少しの富貴が得られれば後は知らない、詐欺の様な愚行を続けようとするのか、A、Bが理解出

来ないのであります。どんなに歴史的事実を焼き尽しても事実は変らない。ならばこの事実を踏まえた真実の法門、事実法門が必要なのであります。その事に寄与することが、今迄大石寺が抱き締めて来た間違つた血脈を木端微塵に否定して来た、正信会の責任だと思ふのであります。正信会も日達上人の所迄流れているというならば、その後は貯っているのか、どうして流れるのか、どうして止めるのか、はっきりさせなくてはいけない。

真実の血脈の必要十分条件

私自身がこれがおかしい、あれがおかしいと指摘するだけで終つてしまえば、同じ穴のムジナで、何の議論の進歩もありませんので、今迄自分が考えて来た、真実の血脈に必要なして十分な条件を満たしている内容とはどういうものなのかという基準を示し、多くの人に、それぞれ当事者として考えてもらいたいと思ふのであります。

釈尊と上行菩薩の間には付属がありますが、上行菩薩と日蓮大聖人との間には、日蓮大聖人の「多宝塔中にして二仏並坐の時・上行菩薩に譲り給

いし題目の五字を日蓮粗ひろめ申すなり、此れ即ち上行菩薩の御使いか」四条金吾殿御返事（全1117P）と自ら上行菩薩の再誕であることを、法華経の内容に添つて、それに叶っている者は日蓮しかいないという情況を証拠として明示しているのであります。

『三国四師』も、釈尊、天台、伝教、日蓮の間には直接的な付属・相承はありません。しかし、日蓮大聖人は、

「天台大師は釈迦に信順し法華宗を助けて震旦に敷揚し、叡山の一家は天台に相承し法華宗を助けて日本に弘通す」等云々、安州の日蓮は恐くは三師に相承し法華宗を助けて末法に流通す三に一を加えて三国四師と号く」 顕仏未来記（全509P）

この様に、法華経弘通という一貫した共通項を示し『相承』と表現しているのです。千年、二千年の時間と国、言葉という空間を超越しても、同じ依経を信じ法華経の内容に合致した生き方、使命、責任によつて相承と考えることには何の不思議もなく、当然の事と思ふのであります。実際の物証的相承があり乍、伝教、義真、円仁と教義が変節して行くものよりは、内容的整合性の合致を相承と考える

事は、根本が信仰であるだけに一番根源となる事だ
と思うのであります。

では、日蓮大聖人は、血脈の本質、本源を何と規定
されていたのでしょうか。釈尊からも、上行菩薩か
らも、物的証拠の相承のない日蓮大聖人は、立教開
宗の建長五年四月二十八日を境にして、自ら蓮長の
名前を捨て、日蓮と改名します。そのことを

「日蓮は日本第一の法華經の行者なりすでに勸持品
の二十行の偈の文は日本国の中には日蓮一人よめり
(中略)」

「日蓮とななる事自解仏乗とも云いつべし」

寂日房御書 (全 903 P)

と示され、

「大法東漸してより僧史に載する所、詎に幾人か曾
て講を聴かずして自ら仏乗を解する者あらん乎」

法華玄義卷一

に示される『自解仏乗』。自ら一切衆生を悉く成仏
させる教えを悟ったとの実感を得たのであります。

この寂日房御書の後に

「かやうに申せば利口げに聞えたけれども道理のさ
すところさもやあらん、經に云く「日月の光明の能

く諸の幽冥を除くが如く斯の人世間に行じて能く衆
生の闇を滅す」と此の文の心よくよく案じさせ給へ、
斯人行世間の五の文字は上行菩薩末法の始の五百年
に出現して南無妙法蓮華經の五字の光明をさしいだ
して無明煩惱の闇をてらすべしと云う事なり、日蓮
は此の上行菩薩の御使いとして日本国の一切衆生に
法華經をうけたもてと勧めしは是なり」

と示し、日蓮と名乗る道理の裏付けは、神力品の

「日月の光明の能く諸の幽冥を除くが如く斯の人世
間に行じて能く衆生の闇を滅す」である。日蓮の日
は、東天より昇り天下を照す太陽。その太陽の光の
本質は南無妙法蓮華經であるから、その『蓮』とし
て日蓮を名乗る者は上行菩薩の使いとして世間に行
じて能く衆生の闇を滅する者であり、かつ、勸持品
二十行の偈の釈尊に対して、仏の滅後において、南
無妙法蓮華經の法を信じ修行し折伏弘通する者に悪
口罵詈、刀、杖を加えられ、生命に及ぶ困難が競い
起つて来ると言われるけれども、必ず忍んで南無妙
法蓮華經の法を説いて行くことを誓います。

と、まさしく常不輕菩薩の生き方を示す内容を満す
為に、自分は『日蓮』と名乗る。自解仏乗の内容は

これだと示すのであります。

『日蓮』と名乗った内容は当然の如く、生涯『法華經の行者日蓮』の名称に集約され貫かれます。佐渡流罪の際に立ち寄った寺泊で、

「法華經は三世の説法の儀式なり、過去の不輕品は今の勸持品、今の勸持品は過去の不輕品なり、今の勸持品は未来の不輕品為る可し、其の時は日蓮は即ち不輕菩薩為るべし」 寺泊御書（全953P）

と述べられている。つまり三段論法を使って、日蓮

未来	現在	過去	
	勸持品 ← 不輕品	①	
	勸持品 → 不輕品	②	
不輕品 ← 勸持品		③	

は不輕品にも勸持品にも叶う生き方をして来た。成仏を遂げようとするならば、未来、末法万年の衆生も日蓮と同じ心で、同じ法華經の行者として法華經を弘めなければいけない。法華經の行者の中味、内容は、日蓮も一切衆生も成仏する為には同じだということを示しているのです。しかし、末法万年、未来の衆

生の生き方は不輕品に全てが表されていると断言しているのです。又、佐渡流罪中の開目抄にも「されば日蓮が法華經の智解は天台伝教には千万が一分も及ぶ事なけれども難を忍び慈悲のすぐれたる事は、をそれをもいだきぬべし、（中略）法華經の第五の巻勸持品の二十行の偈は日蓮だにも此の国に生れずば、ほとをど世尊は大妄語の人、八十万億那由佗の菩薩は提婆が虚誑罪にも堕ちぬべし（中略）日蓮法華經のゆへに度々流されずば数々の二字いかにせん、此の二字は天台伝教もいまだよみ給はず況や余人をや、末法の始のしるし恐怖惡世中の金言のあふゆへに但日蓮一人これをよめり」

開目抄（全202P）

と示し、「難を忍び慈悲のすぐれたる事」の、南無妙法蓮華經を不輕品、勸持品の言葉通りに実行する。その目的は一切衆生成仏の為であるという慈悲。それは末法という時を迎へなければ出来ないことなのであると表わしているのであります。

末法という時節を重要と説いているのは、日蓮大聖人だけであります。

平安時代、鎌倉時代の開祖、宗祖といわれる者は、

全て釈尊の説く末法思想によつて、釈尊の教えが有効でなくなるといふのなら、それに變る宗教を見出さなければいけないと、それぞれが正しいと思ふ經文を掴んで、これが一番と主張したのであります。

平安中期より始つたとされる比叡山の千日回峰行も、末法という時代を見据えたものであり、その行の根源は常不輕菩薩の二十四文字の行体によるといわれています。もつとも今日では、行明けになると生き仏の阿闍梨様といわれ、元來の意味から外れ、見せ物のイベントの様になっているのは、天台宗の中で宗教のごつた煮の様になっている事が原因と思われる。しかしこのごつた煮も、末法をどう乗切るかと考えた末の、迷走として行きついた迷路なのであらう。

「天台回峰行の開祖相応が円仁から不動明王法と別尊儀軌護摩法を授けられ上、さらに山中深く幽寂の地を求め歩き、ある夜、叡南岳において薬師如来から、

吾が山は三部諸尊の峰なり、此の峰を巡礼し、山王の諸祠を詣でて毎日遊行の苦行をせよ、これ不輕菩薩の行なり、読誦經典のみ寺にせず、ただ

礼拝を行ずるは事に即して真なる法なり、行満せば不動明王本尊となり一切の災殃を除くべし

との示現をこうむり、ここから相応による叡南無動寺谷とその回峰修行業の歴史がはじまるのである。」

「比叡山と高野山」 景山春樹 著

末法を迎えたら天地がひっくりかえり、権力者もその座からすべり落ち、下剋上の世の中になる。平安末期の世の中の人々が全てそう考えていたのであります。

1910年（明治43年）ハレー彗星が地球に接近した時には、空気がなくなるといわれ、自転車チューブが酸素ボンベなどない時代だった為に、大量に売れたそうであります。又、世界中の人が死んでしまうなら先に死のうと、自殺者が多数にのぼり、御金を持つていても仕方ないと、大散財をする者もいたといひます。

まさしく精神的不安と混乱は、ハレー彗星以上のものが1052年（永承七年、平安中期）（天台大師の説により周の穆王53年を釈尊入滅年として、紀元前949壬申二月十五日を取る）末法に突入したといわれる時代にはあつたと思います。

正法時代千年、像法時代千年の釈尊入滅後二千年が過ぎると、末法万年に入ると釈尊は説きました。

『正』とは、釈尊の在世感覺をそのまま引きずり、釈尊を直に認識している人々も沢山いた時代であった為に、釈尊はこうだった、釈尊の教えはこうだったという感覺を抱いて、あたかも生きている様に千年間過すことが出来るという意味で、正法時代の『正』というのであります。

『像』は映像の像、影という意味で、誰も本物の釈尊を見た人間はいませんから、聞き伝え、言い伝えのイメージで、釈尊という人は立派な人だった。立派な教えを説いたという、その心象に膨らむもので千年間過すことが出来るという意味で、像法時代の『像』というのであります。

『末』は、まったく『正』と『像』の感覺がまったく無い時代。釈尊という仏がいたことも、釈尊が説いた教えがどういふものなのかさえも疑い信じない、正、像の釈尊の残影が粉碎され、磨滅して粉々に微粉末になった状態を『末』と表現しているのです。

「嘉禅法華義疏五」には

佛雖去^レ世法儀未^レ改。謂^二正法時^一。
佛去^レ世久。道化訛替。謂^二像法時^一。
轉復微末。謂^二末法時^一。

「三大部輔注七」には

正者證也。像者似也。末者微也。
と、示されています。

譬えて言う、正法時代にタテ、ヨコ、高さ100mの御影石の真四角な石があったとします。人々不思議な存在だと思い、神が作ったか、仏が作ったか、人間技ではないと世界中から見物に来るように話題になります。この巨大な石が千年の風化を経て、角も丸くなり、まんじゅうの様な50メートル四方の原形から半分の大きさになったとします。しかし50メートル四方でも自然界の中ではめずらしい物体ですから、世界中から見物に来て、この石は元々は一辺100メートルの立方体だったものです。と説明すると、全員がホー。ヘー。と言って50メートル四方でもすごいのに、この二倍あったのかと想像力を膨らませて感心するのであります。

それから又、千年の風化を経て、まったく石はなくなり、立て札に、「ここに二千年昔、100メートル